『主体の解釈学　コレージュ・ド・フランス講義 1981-1982 年度』

2024/2/12
M せんせい

1982 年 2 月 3 日二限目「聴衆からの質問」

■　前半：聴衆からの質問

Q1．ラカン的概念との関連について

Q2．デカルト的契機は結局なんだった？（二つの真理の体制について）

■　後半：前回のつづき

・　ローマ・ヘレニズム時代における「自己への配慮」と「他者への配慮」の関係について
プラトン時代が「他者への配慮」が結果的に自己を救済することになる、としていたのに対し、ローマ・ヘレニズム時代は「関係の逆転」が起こっている：３つのテクストを通じて論証

（1）エピクロス派における友愛

（2）エピクテトスの自己と他者たちとの関係

（3）マルクス・アウレリウスにおける支配力の行使の問題

＊＊

Q1．ラカン的概念との関連について（219-222 頁）

「あなたのおっしゃっていることのなかに、そもそもラカンに由来するいくつかの概念の作用をみることはできないでしょうか。」

：ラカン的概念（語られたことと、いまだ語られず、おそらくはけっして語られないこととのあいだのそうした乖離をもたらすもの）は、フーコーがいう「これは真実だ」といい、「同時にこれは真実ではない」というときの「真実ではない」に関連しているか、という質問？

Ａ1．ゲームとしての真理という問題系の全体が、いわばこの種の言説（ラカン的、ニーチェ的）に行き着く。主体と真理の問題を問うた人は、フーコーの知りうる限りハイデガーとラカンがいる。フーコーはハイデガーを起点としてこうしたことを考えている。

Q2-1. デカルト的契機は結局なんだった？　（222-224 頁）

Ａ2-1. 真理への関係の問題にもかかわる論点である。

■　プラトン以降の哲学における問題（プラトン哲学の根本的な主題）

・　主体はそのものとしては、つまり自らに与えられているそのままの姿では真理を受け入れる能力がない。

・　主体は、真理を受け入れることができるようにしてくれるいくつかの操作、変容、修正を自分自身に対して行うことではじめて、真理を受け入れることができるようになる。

→ **回心＝立ち返り**といった考え方。存在様式を変えなければ真理へ到達することはできない。

－　キリスト教は容易に位置づけやすいが、古代哲学にも見られた発想

■　デカルト以降

・　主体がそのものとして、真理を受け入れることができるようになった。

－　眼を開いて、明証性の糸を常に辿りつつこれをけっして手放さずに、健全に、真っ直ぐに考えさえすれば真理を受け入れることができる。

・　主体が主体でありさえすれば、認識において、真理に到達する道が得られる。その道は、主体という固有の

構造によって開かれている。

- 認識する主体の構造こそが、我々がそれを知り得ないようにしている。したがって、まさにさしあたって到達できないような何かへ主体を到達させてくれるような霊的な変容という考え方は、現実離れした逆説的なものだ。（カント）
- アリストテレス（神学）の例外：霊性の条件なしに主体が神の真理へ到達することを可能にしてくれる、合理的な構造を持った一種の認識
- 経験科学、科学的実践のモデルの作用が変化の背景にありそう。

Q２-2. 二つの真理の体制において、問題になっている真理は同じ真理なのか？（224-225 頁）

A２-2. ちがう。

・ デカルト以降の真理への到達は、固有の規則と基準を持つ認識というかたちを取るようになった。
・ 真理の概念そのものも変わった。

■ プラトン時代

- （真理に）到達した存在そのものが同時に、どの反作用として、それに到達した者の変容の動因となる…
- 新プラトン主義的な循環「私自身を知ることで、私は真理なる存在に到達する。そしてこの存在の真理が、私という存在を変容させ、神に同化するのだ」

■ デカルト以降

- 真理とは、さまざまな対象の領域の認識。<u>対象の認識という概念</u>。

➢ この変容は、哲学が何であるか、真理が何であるか、主体の真理への関係が何であるかを理解するために大変重要。

→それゆえ「哲学と霊性」という軸にしたがって研究しようとしている。

ローマ・ヘレニズム時代における「自己への配慮」と「他者への配慮」の関係について（225-226 頁）

・ 「自己への配慮」と「他者たちの救済」は決定的に分離されたわけではない。
・ カタルシス的なものと政治的なものの分離、というよりかは、関係の逆転が起こっている。

プラトン時代	ローマ・ヘレニズム時代
・ 都市の救済→個人の救済 ・ ひとが自己へ配慮するのは、他者たちの面倒を見る必要があるからである。 ・ 人は他者たちを救うとき、同時に自己自身を救うことになった。	自己への配慮→（付随的な利得として）他者たちの利益、他者たちの救済、他者たちへ配慮するその仕方、彼らの救済を可能にし、彼らが自らを救済するのを助ける

関係の逆転を３つのテクストから参照

（1）エピクロス派における友愛（226-229 頁）

・ 友愛と有用性の関係性
  ◆ 「あらゆる友愛は、それ自体で望ましいものだ」それ自体のために、それ自体のゆえに選ばれなくてはならない。
  ◇ 友愛はその始まりを、有用性から得ている。

- 友愛は有用であればあるほど、それだけ望ましくなくなる、相互排除の関係があるかのよう。

・ 「ヴァチカンの格言」39

①有用なものだけを求める者は友人ではない

②友愛の関係から有用なものを完全に駆逐した者が友人であると考えるべきでない。

：友愛はそれ自体として望ましくなるのだが、それは有用性を除き去ることによってではなく、反対に有用性と有用性以外の何かとの間に一定の平衡を実現することによってそうなる

→有用な関係を恒常的に維持してはじめて望ましいものになる。

・ 平衡を実現するもの：

- 「全生涯の祝福を得るために知恵が手に入れるものどものうち、友愛の所有こそが、わけても最大のものである」
- 「われわれが必要とするのは、友人からの援助そのことではなくて、むしろ、援助についての信なのである」

友人の存在により、現実の助けというよりはむしろ、こうした助けを得ることができるという確信と信頼がある

▼

世界からくるさまざまな苦痛に対して私たちが可能な限り守られている、という確信を持つことができる

▼

だから、友愛が至福（：アタラクシア／惑乱のない状態）の一部になる

・ ひとが友愛において求めるのは自己自身であり、あるいは自分自身の幸福であるとする徹底した態度がみられる。

➢ 友愛とは、自己への配慮に与えられる形式の一つ

その余剰としての友愛の相互性：

＜私たちが友愛から引き出す有用性＞と＜私たちの友人が、私たちが彼らに示す友愛から引き出す有用性＞

- 有用性に幸福の内部における役割を与えているのは、友人たちにたいして私たちが持っている信頼である。友人たちは私たちにたいして、私たちが彼らにたいするのと同じようにふるまうことができる。

（独り言）有用性を得たいというきっかけで友人を得ようとすることは、自己の配慮の一環である。しかしその関係を持続することはお互いがお互いにとって何かあったときに支えてくれるだろうという信頼関係につながる。その信頼関係を持つことが、自己の配慮を通して目指す至福を達成させる一つになる。能登半島地震における被災者と友愛でつながろうとすることの意味や意義。

（2）エピクテトスの自己と他者たちとの関係（229-233 頁）

：共同体的存在としての人間というストア派の考え方の例として

・ 自己への配慮と他者たちの結びつきの展開

一つ目の水準：自然的な水準「摂理による結びつき」

- 世界の秩序は、あらゆる生物が自分自身の利益を求めるというふうにして成り立っている。
- 摂理、ゼウス、神、世界の合理性は、自分自身の利益を求めるたびごとに、他の者どもの利益をなすようにしている。（自分のためにやることは、非社会的でも反社会的でもない）

二つ目の水準：反省的な水準（理性的存在としての人間が問題になるときに見出される）

- 動物は、自らの利益をなすために自分自身に配慮する必要がない。
- 人間（理性的動物）は、自分自身に委ねられており、自分自身に配慮しなくてはならない。

→ 動物との違いを全うするために、自分自身を配慮の対象としなくてはならない。

→ 自分を配慮の対象とすることで、人間は自分は何であるか、自分であるものが何なのか、自分でないものが何か：自分の権内にあるものが何か、権内にないものが何かを問う。

・ 自分自身に気を配ってる者は、彼が人間共同体に属している限りにおいて持っている義務を果たす術も心得る。

：父の義務、子の義務、夫の義務、市民の義務を果たすことができるのは、自分自身へ配慮したから。

例）病気の愛娘を持つ父親

・ 娘への配慮→心乱され逃亡に至る→娘は死んでしまうかも。

理性によって発せられていたあの命令に従って振る舞う代わりに、娘のことしか配慮せず、娘のことしか考えず、自分自身に配慮してしまったことが過ちである

・ 自分自身に配慮→自分がとるべきふさわしい態度がわかる→冷静に娘を手当

理性的個人として、自分を考慮に入れたら、自分が何であるか、娘がなにであるか、そして彼女と君の間に成立する結びつきの本性と基礎を細かく検討すべきだった。（学校にかよって、じぶんの臆見を体系的に吟味することを覚えたほうがよい）

➢ どのようにして自己への配慮が、それ自体として、そしてその帰結として、実際に他者たちへ配慮するような振る舞いを生み出し、誘発するのかが示されている。

➢ 反対に他者たちへの配慮を先にもってくるなら、すべては失われてしまう。

（独り言）たとえば、自己への配慮を通じて、わたしがＭせんせいとしてどう振る舞うべきかを吟味することが、結果として、わたしがしかるべく振る舞うことにつながり、Ｍ せんせいと関係をもつ他者に配慮するような振る舞いを結果として生み出しうる。

（3）マルクス・アウレリウスにおける支配力の行使の問題（233-237 頁）

・ 他者への配慮が自己への配慮に優先されなくてはならないはずの存在としての君主

- 他者たちに対して権力を行使するがゆえに、自分と他者たちに対して、誰ともまったく異なった種類の関係を持つことがありうる。

・ マルクス・アウレリウスの例

- 第 16 代ローマ皇帝（五賢帝最後の皇帝）
- 『自省録』の著者
- 「哲人君主」の実践例とみなされる。

→ 彼が皇帝として「他者たちに配慮すること」と「自己に配慮すること」との間の関係をどう考えていたか。

■ 他者たちに対する振る舞いの規則として、君主にもほかのいかなる人にもまったく共通でありうる規則を提示していた。

- 「心の底まで『皇帝』になってしまい、それに染まりきることのないように心せよ。これは実際に起こる現象なのだから。されば、よく気を付け、おまえを単純素朴にして善良な、汚れなく、謹厳にして虚飾なき、正義を友とし、神を敬い、心に笑みを忘れず、親愛に道、おのれの義務に有能な者とせよ。」

■ アウレリウスの良心の吟味

・ 夕べの吟味：一日の出来事を取り上げ、為すべきであったことと照らして判断

・ 朝の吟味：なすべき務めに対して準備を行う。

- 「私は自分が何をすることになっているかを思い出す。そして誰もが何かするべきことを持っているということを思い出す。踊り子も、靴屋などの職人も…。私がなさねばならぬ事柄の重要性は一層大きいが、彼らのものと性質の違いはないし、特殊であるということもない。たんにより重い責任があるだけ。他のどんな職業、仕事とも同じタイプのもので、ただいわば量的な負荷分があるだけ」

- アウレリウスが目指す、彼にとっての実存の目的、彼がつねにめがけるべき目的が、皇帝であることではなく、自分自身であることであった。（だから、支配権、君主の地位は、職業となり仕事になった！）
- 皇帝は自分自身に配慮するゆえにこそ、さまざまな職務に出会うことになる。
- その職務は皇帝にふさわしい威厳のある仕方で成し遂げられなくてはならない。
- ただそれは、それらの職務が自分自身にとって自分自身である、という一般的な目的の一部をなすものである限りにおいてでしかない。
  - 「おまえの勤めに注意深い眼を注ぎ、その正体を見抜け。そのさい、おまえは善き人間にならねばならぬことと、[人間の]本然の性はなにを求めているかを、合わせ想い起こしつつ、おまえは脇目もふらず、もっとも正しいと思われる仕方で、それを実行に移せ。」
    - 課せられた勤めに注意深い眼を注ぐこと：身分の帰結による支配権や至上権なのではない。職務であり、他と変わらぬ仕事である、ということ。
    - ただ一人の人によってしか行われ得ない特殊な仕事（支配）なので、注意して見る必要がある。（ある勤めの特徴のひとつとして捉えられるようなもの）
    - 善き人間でなくてはならないという、本然の性が何を求めているか、ということによって務めの注意深い検討は指標が定められ、方向づけられなくてはならない。（人類のためや公共の利益のためではなく、自分自身が何を求めているか、によって基礎づけられる）
- 自己への配慮においてこそ、自己による自己に向かう努力としての、自己の自己への関係においてこそ、皇帝は自分自身の利益のみならず、他者たちの利益をもなすことになる。

感想

「自己への配慮」とは、自分にとっての＜正しさ＞≒真理を志し、そのありようをどうしたら体現することができるのかを実践を通じて考えていくことなのだと感じた。目指すべき＜正しさ＞は、キリスト教的な発想から提示されることもあったかもしれないし、「民主主義的な理想」から内面化されていくこともあったのかもしれない。絶対的な存在としての他者から提示される「正しさ」ではなく、友人として存在している「他者」との出会いを通じて、ありうべき自己像を描いていくことができるようになったのが現代ともいえるのかもしれない。ただ、揺らがない普遍的な「正しさ／真理」を失ってしまったかもしれず、出会う「他者」によって目指すべき自己像も揺らいだりしてしまうのだろうか。(例えば、娘として、妻として、母として、友人として、教師として、生徒として…の自己のありようを思い描くことと、自分にとっての「正しさ／真理」はどのような関係性にあるのだろうか)

ただし、社会性に自らをおいたとき、自らに見出す「あるべき自己のありよう」は、それを全うしようと努力するとき、社会性の中から発想されたものである限り、結果として他者への配慮にもつながりうるのだ、という点に希望を感じた。

感想追記

それにしても、裏金議員たちはアウレリウス帝のような精神を持ち合わせていないのか、忘れてしまったのか、疑問である。

たまたまイヴァン・イリイチの『テクストのぶどう畑で』という本を読んだが、12 世紀ごろにサン＝ヴィクトール修道院のユーグによって書かれた『学習論』について取り上げられていた。これが、まさに自己への配慮のための技法のひとつとして提唱されたもののように読めて大変興味深かった。以下、重なった部分を列記。

- 「ユーグが探求する知とは、キリストその人である。学習、特に読むことは治癒者たるキリスト、範例、そして形相たるキリスト探索のための形式にすぎない。知は、堕落した人間が失いふたたび手に入れたいと望

むものである。堕落した人間にとって必要なことは、知とふたたび結ばれることにあるとユーグは考える。…中略…ユーグが理解し、解釈する読書とは、ひとつの存在論上の治癒のための技術である。」（5 頁）

◆ 「ユーグは読書する人に対し、＜汝自身を識るために＞、自我を確立するために、おのれ自身をページから放射される光にさらすようにと説く。書物を輝かす知の光の中で、読書する人の自我は灯をともす。そしてその光の中でおのれ自身を認識するのである。…中略…今日われわれは、「自我」あるいは「個人」という言葉を日常会話の中でよく用いるが、この言葉の意味するものは、実は十二世紀の大きな発見の一つなのである。ギリシア、ローマの諸概念のいずこにも、この言葉がぴったりと該当すると考えられるものはない。」（16 頁）

◆ 「ユーグは彼の学生へ、学者ぶるために読書するのではないと、さらにたたみかける。そうではなく『賢人の言葉を探し、それを常に心の眼の前に置き、あたかもおのれの顔を写す鏡とせよ』、『私たちは、あなたの光のうちに光を見るからです』と説く。」（20 頁）

◆ 「ユーグにとって友愛とは、＜知＞あるいは味わい深い知識を愛する心にあたる言葉である。友は、＜楽園の同胞＞である。「友が現れるや、周囲には美しさが満ちる。そして友愛とは、楽園であり、人生の樹木であり、神のもとへ旅立つための翼であり、（中略）優しさ、明るさ、活力、痛手であり、（中略）取り戻したパラダイスである。」『学習論』の中でユーグが知の魅力を語る時、彼は＜学習＞の究極の動機として友愛を隠喩的に用いずにはおれないのだった。ユーグの同時代人は、友の知識を楽しめないような友情の欠けた知識は不完全なものであるというプラトンの考えを復興し、数世代をかけてキリスト教に取り入れたのだった。そしてユーグ自身は、この種の経験こそ＜学習＞の究極の目標であると解説せずにはおれなかった。学生の精神を包む知の輝きは、周囲の人々を常に友として遇しながら、彼をおのれ自身へと引き寄せる。この世の眼に見えるものを通して、真の読者は眼に見えないものへと突き進み（中略）、栄光ある神の腕の中での結合を目指して、おのれの心の内なるきざはしを登りつめるのである。」（21-22 頁）